編集後記：2019年１月号の「天気」で『球雷の目撃情報（その２）』という12年ぶりの異色な話題の続編が掲載されました．ここで，数少ない球雷の目撃者として（詳しくは2007年１月号「球雷の目撃情報」をご参照下さい），記事の感想を書かせて頂きます．今回の記事には目撃情報の再現イラストが掲載され，このイラストの出来が良く，私が2006年夏にみた球雷の記憶を再び思い出させてくれました．記事内では“青白いスパーク状の光”や“球体内部は黒っぽかった”という矛盾したような描写がありますが，私も一部共通の認識で，今は強烈な白色発光の補色残像のために記憶には黒い光として残ったと考えています．また再現イラストの形状がアニメ版「ナルト」で描かれる螺旋丸という技にそっくりですが，これも私が数秒間の発光の中に見た光の筋を全部書き足せば類似のものだったと思います．色の表現で私の説明と逆の箇所も，強烈な光の補色残像の影響だろうと目撃者として理解できます．もしも私が2006年の夏にあの光の玉に触れていたら，これら２編の球雷の記事は「天気」に投稿されることもなく，「天気」編集委員の私も存在せず，こうして編集後記を書くこともなかっただろうと思うと感慨深いです（あるいは，光を吸収して雷属性の特殊能力に目覚めていたか!?）．

ところで，この“球雷”をgoogleで検索すると，2007年の記事がWikipediaに次いで２番目に出てきます（2019年11月時点）．改めて本誌の影響の大きさを実感します．もしかすると近年の日本のアニメの描写に多大な影響を及ぼしていたかもしれません．そんな冗談は置いといて，「天気」はオンラインでも容易に閲覧・検索が可能で，数少ない日本語の気象分野の専門誌の１つです．さらにこの１年は，J-stageへの論文掲載，Twitterの投稿など電子媒体での情報発信にも力が注がれた年でした．じっくりと冊子版を読む会員の方もいれば，ふとしたネット検索で「天気」に出会っている読者もたくさんいるでしょう．そんな皆様に令和２年以降も少しでも良い情報が提供できるよう，球雷に触れないで編集委員になれた自分も，微力ながら頑張らせていただきます．

（南雲信宏）